



出前ワークショップ



夏真っ盛りの8月9日、椿小学校体育館において、椿児童クラブへの出前ワークショップを行いました。ワークショップのタイトルは、「絵の具でベタベタ」です。体全体を使って絵の具の触感を確かめながら造形遊びを体験させることで、造形活動の楽しさを味わわせるとともに、感性や想像力を高めようという講座です。

当日は40名程度の小学生(1年生と3年生)に加えて、博物館実習の大学生にもお手伝いをしてもらいました。

開始前に実習生の力を借りて障子紙を貼りあわせ、約4m×7.5mの大きな紙を2枚作りました。貼りあわせた障子紙をブルーシートの上に置き、いよいよ活動開始!

黄と青の絵の具を使うグループと黄と赤の絵の具を使うグループにわかれた後、ついに「絵の具でベタベタ」スタートです!

まずは親指に絵の具をつけ、障子紙にスタンプ!次に手のひらに絵の具をつけ、スタンプ!そして最後に足の裏に絵の具をつけ、スタンプ!

子どもたちは「笑顔爆発!」最初からはじめてました!あっという間に障子紙は絵の具まみれ。2色がいい感じに混ざり合い、「芸術」的な色加減に!しかし、最後の方はがんばりすぎて障子紙がやぶれたり、服もベタベタしちゃったり…。でも、ホントみんないい顔してました!その顔を見るとこちらもつい笑顔に。造形活動の楽しさや幸せを再確認した一日となりました。児童の皆さん、児童クラブ関係者の皆さん、ありがとうございました。(楢垣)



普及レポート



連続講座『ねこフェルト』



今回は、「いつだって猫展」に因み、参加者に愛猫の写真を持ち寄っていただき、「猫」を作ることに。針先に小さな窪みが作られた専用の針で、作りたい形に整えた羊毛を真っ直ぐ刺すと、その針の窪みに羊毛が絡まり、上下に移動させてくれます。それによって少しずつフェルト化していきます。

グレーの羊毛を芯に大体の形を作成してから、猫に見立てていきます。案外しっかり作ろうと思うと時間がかかる制作です。講座の1時間半で粗方の形をつくり、自宅に持ち帰り、少しずつ仕上げながら一週間後に再度持ち寄ってもらいました。皆さん、自宅でも刺し続けていた成果が窺えます。2回目の講座で、好みの色の羊毛を付けて、最終仕上げをしていただきました。

流石に猫好きが集まっていて、自然に羊毛を丸くして形を作りかけるのですが、実際に羊毛を刺して形作っていくと、ここってどんな形だったかな?とふと手が止まり、写真を見比べながらの制作になりました。作り途中のフェルトの猫も様々な角度から眺め回しながら制作していかないと、一面だけ作っていると、平面的な形になってしまいます。

お母さんと一緒に参加してくれていた中学生の制作好きな男の子は、あまり差し込みをきつくせず、思いつくままにふんわりと刺してくれました。一匹の猫を仕上げるのに悪戦苦闘の大人たちを尻目に、講座中に3点の作品を完成させました。二日目の猫の顔は、祖父母からの依頼だそうです。きっと気に入ってくれたでしょう。(田代)



中学生の作品!

針でひたすらチクチク

つぶやき



4月からの半年あまりで、たくさんの知り合いに再会することができました。美術館に勤務していないと一生会えなかったらどうな、という人たちもいました。さて、今日は誰に会えるかな?(楢垣)

Column 作品保存のおはなし

著作権について



「著作権」という言葉も広く知られるようになりました。著作権は、美術のみならず演劇・音楽・文学など多岐にわたりますが、ここでは、美術に関するものを少しご紹介します。

著作権で対象となる著作物とは、独自性のある創作物(作品)のことです。これは、プロ・アマに関わらず、自分の考えによって表現された創作物のことを指します。また、著作権者とは、その制作者(作家)を指し、申告制ではないので作成した時から制作者の没後50年間、守られる権利となります。

著作権で鑑賞者の方が関わってくるところでは、著作物を撮影したり、コピーしたりする複製権、SNSなどにアップする公衆送信権かと思えます。全て、申告制の権利のため、著作権者が問題視をしない限り問われることはありませんが、

制作者の権利を尊重するため、勝手に複製したり、公衆送信をしたりすることは禁止されています。

そこで、美術館でも、著作権者より特別の許可が出ない限り、鑑賞者の皆様にも展示室内での写真撮影をお断りしているところですよ。

著作権は個人利用であれば、問題がないと思われる方が多いですが、デジタル方式での複写・録画は問題となることもあります。自分のブログやSNSにアップすることも、個人利用とはみなされません。また、チラシやポスターは、使用している作品画像の著作権のほか、デザイナーの著作権も絡んできて複雑になります。どうぞ、ご注意ください。(田代)

ウィリアム・モリス

企画展

原風景でたどるデザインの軌跡

2017年1月7日(土) ~ 2月12日(日)

主催:「ウィリアム・モリス展」愛媛展実行委員会(愛媛県、テレビ愛媛)



19世紀イギリスを代表するデザイナーの一人、ウィリアム・モリス(1834-96)は、中世の文化に憧れ、自然を愛し、手仕事を重んじて独自の美を形作り、英国ヴィクトリア朝の爛熟したデザイン界に新風を吹き込みました。ただ生きるのではなく美しく生きることを理想とした彼の信念は職業人、一個人、家庭人、社会人として首尾一貫したもので、インテリアや書物などのデザイン、アートディレクションに才能を開花させ、美しいモノに囲まれたライフスタイルを自ら実践し、販売事業や社会運動により社会全体の美化を目指しました。一世を風靡したモリスの古風で雅趣に富む滋味豊かなデザイン、視覚表現は、没後120年の間にその社会的評価を揺るぎないものとし、多くの優れたデザイナーや美術家に影響を及ぼしてきました。

本展では、英国各地に移り住み、各々の場所の環境に触発されて思考し、次々に新展開を見せたモリスの生涯を、多彩な映像も交えて6章構成で紹介。モリスの原風景を求めて英国を旅した写真家、織作峰子氏をナビゲーターに、モリスの類まれな知性と感性を育んだ自然や風土、文物、人々の面影を追いながら、モリスの作品世界に親しんで頂きます。モリスとその仲間たちの手になるテキスタイルや壁紙、家具、書物など、当時の貴重な作品に備わる完成された様式美に触れて頂くと同時に、織作氏の写真の中に、かつてモリスたちが感応した外界の美と詩情に通じるものを感じ取って頂きたいです。加えて、織作氏がモリスや彼の弟子ダール(1860-1932)の作品にインスピレーションを得て、印画紙に手彩色を施す独自の手法で制作した、「DIMENSIONS」シリーズの新作もご覧頂きます。モリスが創造した地上の楽園とも言うべき作品世界を散策し、輝きに充ちた暮らしを送る原動力となる知恵の実を探して頂ければ幸いです。(武田)

デザイン:ウィリアム・モリス/製作社:モリス商会
壁紙(りんご)1877年 木版、色刷り photo © Brain Trust Inc.



愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511
<http://www.ehime-art.jp>



11月27日に18回目の開館記念日を迎え、恒例の開館記念イベントが開催されました。開館記念イベント始まって以来の雨に見舞われた1日でしたが、多くの方に来場いただき、美術館にとって何よりの誕生日プレゼントとなりました。ありがとうございました。(石崎)

企画展

生誕140年

杉浦非水

A Retrospective
開花するモダンデザイン

2017年 2月22日(水)～3月30日(木)

主催:「杉浦非水展」実行委員会(愛媛県、愛媛新聞社)

愛媛県松山市出身の杉浦非水(1876-1965)は、日本におけるモダンデザインの先駆者として高く評価されています。非水ははじめ日本画を学んでいましたが、東京美術学校(現・東京藝術大学)在学中に洋画家・黒田清輝と出会い、やがて黒田がヨーロッパからもたらしたアール・ヌーヴォー様式などに影響を受け、図案家(デザイナー)の道を歩むこととなります。その名を広く知らしめたのは、27年間にわたって担当した三越の一連の広告図案の仕事で、いつの間にか「三越の非水か、非水の三越か」と称されるまでになり、一人のデザイナーが一企業のブランドイメージを決定したと言える、おそらく近代日本で初めての、かつ最も成功したケースです。その他にも、カルピスや東京地下鉄などさまざまな企業ポスターや装丁、雑誌表紙など、幅広い分野の商業デザインを手がけ、日本のグラフィックデザイン黎明期に彼が残した足跡はきわめて大きなものです。

生誕140年を記念して、このたび、当館としては17年ぶりとなる大規模な回顧展を開催することになりました。当館が所蔵する7,000点に及ぶ非水コレクションを軸に、さまざまな作品・資料を紹介いたします。代表作はもちろん、これまで目に触れる機会がなかった資料も多く紹介し、非水の活動を詳細にたどっていきます。名作ポスターの一挙公開、彼が創作の根本に据えていた「写生」への真摯なまなざしを示すスケッチや写真、これまでまとめて捉えられなかった装丁作品、亡くなるまで身の回りで大切に保管されていた美術工芸品やデザイン資料、遺愛の品々など——当館コレクションの特色を最大限に生かした、見どころ満載の展覧会となっていますので、どうぞこの機会に、杉浦非水の魅力的な仕事と実像に触れていただければと思います。(長井)

「非水百花譜」より(椿)(部分)
昭和4-9年(1929-34)当館蔵



《三越呉服店 春の新柄陳列会》大正3年(1914)当館蔵



《非水図案絵葉書》当館蔵



旅行箱(非水旧蔵)当館蔵



つぶやき

「杉浦非水展」準備のため、出品交渉、調査、撮影、図録執筆と、寝ても覚めても非水とともに過ごしてきたこの1年。ご遺族のところへ挨拶にうかがった時にいただいた「一番喜んでくれるのは非水だから、頑張っ！」という激励の言葉が、常に心にありました。(長井)

所蔵品展 企画展「生誕140年 杉浦非水」関連特集展示
2017年 1月27日(金)～3月19日(日)

写生と装飾



土田麦穂《柳蔭》、大正10年(1921)(六曲屏風一双)

当館では「生誕140年 杉浦非水」展を開催しますが、日本における近代デザインの先駆者として近年ますます評価の高まってきているこの巨匠は、デザインの基礎を「写生」に置き、写生の精神を身につけるには日本画を学習するのが望ましいと考えていたようです。19世紀末以降、西洋において日本美術がそのデザイン感覚のゆえに注目されたことを思えば、極めて自然な考え方だったと言えるでしょう。

そこで、この展覧会に連動する企画として、常設展示室1では「写生と装飾」と題し、日本美術における写生とデザイン感覚との近しさを感じさせ

る作品を御覧いただこうと思います。

例えば、土田麦穂の《柳蔭》です。どっしりと安定した太い幹、伸びやかな枝、風にゆれる葉の豊かさ。柳の表現は全体としては写生の確かさ、写実の巧さを感じさせますが、彩色を見ると、かなり単純化、平面化されていることに気がきます。色彩の中には金が入り込まれ、きらびやかです。画面を満たす無数の葉はリズム感を生んでいます。写生に基づきながらもデザイン感覚によって抽象化され、場を装飾する華やかさを発揮しています。日本画における写生と装飾の調和がよく表れています。(梶岡)

愛媛の洋画史 明治～昭和戦前期 / 光風会の作家たち

企画展でご紹介する杉浦非水、彼が愛媛出身とご存知でしたか。

春の所蔵品展では、愛媛出身作家による洋画史を展開します。日本各地の美術館で、その地域ゆかりの作家による作品が所蔵されており、当館も例外ではありません。先鋭的な感性で多分野に活躍した柳瀬正夢、高い描写力により日本の明媚な風景画を記録した中川八郎、独自の色彩感覚で幻想的な世界を表出した野間仁根—作家に少なくない影響を与えた故郷で、その作品に触れられるのも地域の美術館ならではの楽しみです。洋画史の草創期に愛媛に生まれた作家たちが、どの様に画布に向かい、表現の可能性を広げていったのか、愛媛という土地を通して「みる」ことで新たな魅力を見つけてみませんか。

また、明治45年(1912)に非水が設立に関わった美術団体、光風会の作家もあわせてご紹介します。「隠れた無名の花を自由に紹介する廣い花壇を開拓した」と設立趣意書に喩えたように、作家たちに広く発表の場をひらいた光風会は、春の花壇のように多様な作家や作風が、その長い歴史を彩ってきました。愛媛出身の作家も活躍した光風会の歴史の一端を出品作品から感じとっていただければと思います。(喜安)



野間仁根《静物》大正13(1924)年

西洋美術: 旧杉浦非水コレクション

愛媛県松山市出身のグラフィック・デザイナーで美術教育者の杉浦非水(1876-1965)は、はじめ日本画を学んでいましたが、フランス帰りの洋画家、黒田清輝(1866-1924)が日本にもたらしたアール・ヌーヴォーの品々に心を動かされて、デザインの道を志すようになりました。自らも、アール・ヌーヴォーを代表するデザイナーの一人であるアルフォンス・ミュシャ(1860-1939)のポスターなど、西洋の諸作品を集めて愛好し、創作の参考にし、時として展覧会に貸し出して一般の鑑賞に供することもあった杉浦非水。その関心の対象は、ドイツ表現主義のマックス・ペヒシュタイン(1881-1955)の作品など、アール・ヌーヴォー以外の様式の作品にも及んでいました。また彼は、実際に交流した同時代の画家から贈られた絵も大切にしていました。本展では、当館が杉浦非水のご遺族より受け継いだコレクションから、西洋の諸作品を特集集します。杉浦非水の作品世界の形成の背後に何があったのか、垣間見て頂ければ幸いです。(武田)



ウジェーヌ・ララス《冥想》1897年 リトグラフ